



神の怒りから免れるには

すると、主の聖所の入り口で、廊と祭壇の間に、二十五人ほどの人がいて、主の聖所を背にし、顔を東に向けていた。彼らは東に向かって太陽を拝んでいるではないか。」

(エゼキエル書 8 章 16 節)

この出来事は、預言者エゼキエルが見たもので、紀元前 592 年に起こったことが確認されています。当時、ユダの王は攻め寄せてきたバビロニアによって捕らえられていましたが、まだ国は亡びてははず、エルサレムの都も神殿も残っているという状況でありました。

主なる神の御手が預言者エゼキエルを、彼がよく知っているエルサレムの神殿に連れて来ました。エゼキエルがまず北に面する内側の門の入り口を見ると激怒を招く像がありました。今の時代に例えてみると、キリスト教会の庭にあやしげな偶像神が置かれているようなものです。

エゼキエルが次に、神に命じられるまま壁に穴をあけ、入り口から入っていくと、周りの壁一面に、隣国エジプトの神々が彫り込まれてあるのが見えました。そこにはイスラエルの長老たち 70 人ほどが立っていて、「主は我々を御覧にならない。主はこの地を捨てられた」と言っていました。国が亡びにひんしていた時代、彼らはそれがイスラエルの民の不信仰に対する神の怒りであることを見ようとせず、逆に神に責任を転嫁していたのです。彼らは正しい信仰に立ち返って国を救おうとはせず、南の大国エジプトに頼って国を守ろうとしていました。神殿は主なる神を礼拝するために建設されたものでしたから、その時もやはり主なる神を礼拝していたということでは変わりありません。しかしながら、壁の内側ではエジプトの神々が礼拝されていたのです。

エゼキエルはさらに、神殿の北に面した門の入り口に連れていかれました。そこでは女たちがタンムズという植物の神のために泣きながら座っていました。

エゼキエルは最後に、神殿の中庭に連れて

2020 年 12 月発行

行かれました。すると聖所の入り口で、廊と祭壇の間に 25 人ほどの人がいて、主の聖所を背にして、太陽を拝んでいるのです。そこにいた人たちはみな祭司であったと考えられます。主なる神のいちばん近くで仕えている人たちが、神に背いてしまったのです。

人間たちの背信に怒った神は、ついにエルサレムの都を滅ぼすことを決意されました。神殿をけがした人がまず殺され、次に都の人々が打たれることになります。

しかし、神のみこころはそれがすべてではありません。神はその恐るべき審判の中ですら、憐れみの心を秘めておられます。神は御使いの一人に命令されます。「都の中、エルサレムの中を巡り、その中で行われているあらゆる忌まわしいことのゆえに、嘆き悲しんでいる者の額に印をつけよ」(9 章 4 節)。神はこの流血と不正に満ちた都エルサレムを滅ぼされますが、それでもこの町に満ちている罪を嘆き悲しむ者の額に救いの印をつけよと言われます。その者たちだけは、神の恐るべき審きから免れることが出来たのです。

マルティン・ルターを初め、むかし宗教改革を実行した人たちは、いわば神殿の壁に穴をあけてその中で行われている現実を見た人ではないでしょうか。…ルターが宗教改革ののろしを上げたのは、免罪符に反対したためでした。カトリック教会は免罪符を販売して、人が死んでから受ける、罪に対する罰をお金でもって解決しようとしたのですが、ルターは神のいますところ、キリストの体である教会で恐ろしいことが行われていることを見て、耐えることが出来なかったのです。それを告発することが自分の身にどれほどの不利益を及ぼすかということを知っていましたが、それでもキリストが自分と共におられることを信じて立ち上がったのです。

エゼキエルが見たことをルターは見ました。私たちもみな、キリストを信じ、教会につながる者として、教会を墮落から守り、改革し続けることに責任を持っています。

(2020 年 10 月 25 日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊